

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	サムエルガーデンⅡ NAKAGAWA(放課後等デイサービス)		
○保護者評価実施期間	2025年 11月 1日		～ 2025年 12月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	14名	(回答者数) 6名
○従業者評価実施期間	2025年 11月 1日		～ 2025年 12月 28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6名	(回答者数) 4名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月 15日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	内装を工夫し、学習スペース(個別支援)と療育スペースを物理的に分けたことで、子どもたちが「今は何をやる時間か」を視覚的に理解しやすくなっています。これにより、集中力の向上と情緒の安定を同時に図る取組を強化しています。	個別の空間を作りつつも、職員の視野が広く保てるよう内装を工夫することで、死角をなくし、子どもの小さな変化やトラブルの兆候にいち早く気づける安全管理を意識しています。	現在行っている「安心を与える支援」をさらに一歩進め、子ども自身が自分のストレスに気づき、セルフケアできるような具体的なプログラム(リラクゼーション技法や感情の言語化トレーニングなど)の導入が期待されます。
2	「学校から帰ったらまずは宿題」というルーティンを徹底することで、生活リズムの構築と学習の遅れに対する不安解消を支援の柱としています。	来所後の流れ(宿題→療育→理念教育)を一定に保つことで、見通しの立ちにくい子どもたちが混乱せず、自発的に行動できるような支援の工夫を行っています。	仕切られた個別スペースを活かし、タブレット学習や個々の特性に合わせたデジタル教材を導入することで、さらにきめ細やかな学習支援の展開が期待できます。
3	キリスト教の理念に基づき、単なるスキルの習得だけでなく「善悪の判断」という道徳観を養うことで、社会性の根幹を育てる支援を充実させています。	子どもがストレスを感じた際、否定されるのではなく、まずは「安心」を得られる環境(居場所)であることを意識的に徹底しています。これは、挑戦する意欲を育てるための「心の安全基地」としての役割を重視しているためです。	「善悪の教え」や「安心感の提供」という素晴らしい理念を、家庭での接し方にも活かせるよう、保護者向けの勉強会や情報共有の場をさらに広げていく取組も有益です。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	個別の学習環境を重視するあまり、子ども同士が関わり合い、社会性を育む「集団療育」の場面が少なくなってしまう傾向があります。	内装を仕切って集中しやすい環境を作った結果、物理的に「他者の存在」を意識しにくくなり、集団の中での譲り合いや協調性を学ぶ機会が物理的に制限されていると考えられます。	個別ブースだけでなく、意図的に「小グループでの協力作業」を取り入れる時間を設定します。例えば、宿題が終わった後の自由時間に、複数人でルールを守って遊ぶ「集団SST」の時間を構造化します。
2	「まずは宿題」というルーティンが固定化されているため、創造的な遊びや、体を大きく動かすダイナミックな活動が不足しがちになる面があります。	学校からの帰宅時間が遅くなる場合、宿題を優先すると、本来の「療育プログラム(SSTや感覚統合など)」に割ける時間が圧迫されてしまう構造的な問題があります。	曜日ごとに「学習重点日」と「活動重点日」を設けるなど、宿題だけでなく、心身の成長に必要な多様な体験(外遊び、調理、創作など)を保障するタイムスケジュールの再構築を図ります。
3	「善悪の教え」という抽象的な概念を伝える際、発達の段階や特性(知的障害の程度など)によって、理解度に大きな差が出てしまうことが課題です。	キリスト教の理念や道徳教育が、ベテラン職員の経験や言葉に頼っている部分があり、経験の浅い職員が同じように「安心感」や「善悪」を伝えるための具体的なマニュアル化が追いついていません。	「善悪」や「安心」という抽象的な教えを、イラストやカード(視覚支援ツール)を用いて具体化します。「こういう時はこうする」という具体的な行動規範(ソーシャル・ストーリー)を作成し、どの職員でも同じ基準で指導できるようにします。

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	サムエルガーデンⅢNAKAMURA (放課後等デイサービス)		
○保護者評価実施期間	2025年 11月 26日		～ 2025年 12月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	19	(回答者数) 14
○従業者評価実施期間	2025年 11月 26日		～ 2025年 12月 28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 5
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月 20日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	1. 礼拝を通した自己コントロールと集中力の育成 放課後の子供たちは、学校での集団生活を終えて心身ともに興奮状態にあります。私たちは毎日のプログラムの冒頭に「礼拝」を置くことで、高ぶった感情を穏やかに鎮め、自分自身と向き合う「静」の時間を何よりも大切にしています。これは単なる習慣ではなく、生涯にわたって必要となる自己規律（セルフコントロール）の基礎を築くための重要な療育の柱です。	子供たちが自然に「今は静かにする時間だ」と直感的に理解できるように、視覚・聴覚的な環境設定（構造化）を徹底しています。照明を少し落とし、落ち着いたBGMを流すことで、言葉による指示に頼りすぎず、空間全体で「静寂」を共有します。また、短い時間でも静かに座れたこと、お話を聞いたことを具体的に認め、子供たちの自信へと繋げています。	今後は、この礼拝によって整えられた「集中力」を、直後の学習や創作活動へスムーズに繋げる仕組みをより強固にします。静寂から活動へと移る際の「心の切り替えスイッチ」をルーティン化し、どのお子様も落ち着いて次のステップへ移行できる環境を確立していきます。
2	2. 環境分離による自由な活動と学習習慣の定着 未就学児（児発）と学童期（放デイ）では、身体能力も興味関心も大きく異なります。私たちは、児発と放デイのスペースを物理的に分けることで、小さなお子様が大きな子に遠慮することなく、年齢相応の「思いきり遊べる」環境を保障しています。同時に、放デイでは学校帰りの「学習習慣（宿題）」を最優先し、規則正しい生活リズムの形成を強力にバックアップします。	児発では全身をダイナミックに動かせる安全な遊具配置を行い、五感を刺激する遊びを展開します。放デイでは、学校の宿題を「事業所で終わらせる」ことをルール化し、家庭での負担を軽減するとともに、スタッフが寄り添うことで「できた！」という達成感を積み重ねるサポートを行っています。	集中力が散漫になりやすいお子様のために、視界を遮るパーテーション付きの個別学習ブースを増設するなど、より深い学習環境の提供を目指します。また、児発から放デイへ進級する際の不安を解消するため、年長児が定期的に放デイの活動を体験できる「ブレ移行プログラム」を充実させ、一貫した支援体制を整えます。
3	3. 外出支援とイベントを通した生きた社会学習 土曜日や祝日は、平日のルーティンから一歩踏み出し、地域社会という広いフィールドへ。私たちは「外出支援」を単なるレジャーではなく、「生きた社会マナーを学ぶ実践の場」と定義しています。公共交通機関の利用、施設でのルール遵守、集団行動の規律など、教科書では学べない生きた社会性を育みます。	「初めての場所」への不安を軽減するため、事前に写真や地図を用いたスケジュール表（視覚的支援）を提示し、見通しを持たせてから出発します。スタッフは黒子に徹し、お子様が自ら切符を買ったり、注文をしたりする「小さな挑戦」を影から支え、成功体験を最大化させる関わりを意識しています。	今後は「行って楽しかった」で終わらせず、事前学習でマナーを確認し、事後学習で思い出を言語化・絵画化する「3ステップ型イベント」へと進化させます。これにより、外出体験を長期的な記憶とスキルの定着へと結びつけ、お子様の社会的な自立をより確実なものにしていきます。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	1. 「静」と「動」の切り替えに伴うパニックやストレス 強みである「礼拝（静）」と「遊び・学習（動）」のコントラストが強すぎるため、変化に弱いお子様にとって、活動の切り替わりが大きな負担（ストレス）になることがあります。	発達障がい特性を持つお子様の中には、脳の「切り替え（セット・シフティング）」が苦手な方が多いため、静寂から喧騒、あるいはその逆への急激な変化に、心身が追いつかず情緒不安を招く場合があります。	・「中間（移行）時間」の設置：礼拝が終わってすぐに活動に移るのではなく、3分間の「クールダウンタイム」や「ストレッチ」を挟み、段階的に活動のボリュームを上げます。 ・カウントダウンの視覚化：砂時計やタイムタイマーを活用し、「あと何分で静かな時間が終わるか（始まるか）」を可視化することで、見直しによる安心感を提供します。
2	2. 「環境分離」による一貫した支援体制の分断 児発と放デイを物理的に分けていることは大きなメリットですが、一方で「児発での成長の記録」や「こだわりの対応」が放デイ側に十分に引き継がれない「支援の断絶」が起こりやすくなります。	場所が分かれていることで、スタッフ間の対面での情報共有が不足しがちになります。また、児発で慣れ親しんだ担当スタッフから放デイの新スタッフへ代わる際、お子様が「自分を理解してもらえていない」と感じるリスクがあります。	・「縦の連携」強化会議：児発から放デイへ進級する数ヶ月前から、両部門のスタッフによる「ケース会議」を定例化し、個別の配慮事項を詳細に共有します。 ・合同イベントの開催：月に一度、児発と放デイが緩やかに交流する時間を設け、お子様が将来過ごす場所やスタッフに「顔なじみ」になっておく機会を作ります。
3	3. 外出支援における「安全管理」と「スタッフの負担」土曜日・祝日の外出支援は付加価値が高い一方で、室内療育に比べて事故のリスクが飛躍的に高まり、引率するスタッフには極めて高い集中力と責任が求められます。	公共の場では予測不能な事態（飛び出し、迷子、他者とのトラブル）が起こりやすく、スタッフの「見守りスキル」の差が安全性を左右してしまいます。また、休日出勤が続くことによるスタッフの慢性的な疲労も、安全管理能力を低下させる要因となります。	・ITを活用した安全管理：外出先でのスタッフ間の連絡をインカム（無線）で行い、リアルタイムで情報を共有。また、リスクの高いお子様にはGPSタグを一時的に活用するなど、テクノロジーで安全を補完します。 ・下見の徹底とマニュアル化：「ここには飛び出し注意箇所がある」といったリスク箇所を写真付きで共有する「外出先カルテ」を整備し、経験の浅いスタッフでもベテランと同じ視点で動けるよう標準化を図ります。